

ヘミングウェイの詩

佐藤英夫

E. Hemingwayがわれわれに与えるその重量感が、少くとも部分的には個人的な神話、つまり彼が高度に意識化された生活によって、自己のまわりに築きあげた伝説からくるものであることは間違いのない事実であり、40年以上にわたり、危険に身をさらし、その間に受けた多くの打撃によって心身ともに徹底的に痛めつけられていたので、ついにあの日の朝、彼にそのようなことが起ったとしても、それは彼の人生に於いては当然の成り行きであると一般的に感じられたのであった。すなわち、1961年7月2日の朝、若き日の活力はもはや二度と戻らないものと感じたこの老人は、常に軽蔑してきたぶざまな死に方はしたくないものであると考えて、ケッチャム（Ketchum）の山荘で12口径の猟銃をつかい、自殺したのである。ぎりぎりの極限状況を、旺盛な活力と虚勢を練り合わせて生きてきたような人間であるので、彼の人生は40年間も世界中の人々に闘争性と勇気、また人間的冒険への熱意について一つの模範を提供してきた。その熱意は彼の場合、驚くべきことに自己防衛的な分別という動機によって少しも汚されていないように思はれるのである。こんなわけで、彼もその作品と同様、作家自身にまつわる神話がわれわれの注目を引きつけるのである。そういう現代作家の一人であって、彼の伝説の魅力は今日もなお強烈に感じとられ続けているのである。しかしその中でも、隠されたもの、つまりわれわれに迫ってくる彼の迫力の大部分—真に重要な部分—は明らかに伝説とは無関係なのである。それは世界に於ける人間の極限状況、その挑戦

と危険，また大地は永遠に存続するという約束をさし示しつつ，地上にかかる栄光の雲について，彼の芸術が伝えているヴィジョンと関係があるのである。

彼が芸術家としてわれわれに与えた究極的影響は「明確な道徳的態度を教える」ところにある。つまり人々に世界の極限的な神聖さに対する感覚と，人生そのものが賜物であるという意識とを教え，まさに超越の可能性，つまり良心的かつ誠実に正しい道を歩むものは，最後には人生に勝つことができるという自信を与えるところにあつたのである。

E. Hemingway と言えば確かにノーベル賞受賞作品でもあり，作家 E. Hemingway 自身の終着駅ともなった「老人と海」(The Old Man and the Sea) を世に送り出した小説家として名声を博したことは周知の事実である。1926年に「日はまた昇る」(The Sun Also Rises—別名 Fiesta) を出版し“失われた世代”(Lost Generation)¹⁾ の作家としての地位を確立するまでに1923年，パリのコンタクト (Contact) 社より処女出版した「三つの短篇と十の詩」(Three Stories and Ten Poems) を中心に約30篇の詩も創作したと言われている。しかし現在残っているものはせいぜい20篇前後ではないであろうか。詩篇そのものがすぐれた短篇や長編のかげにかくされて，ないがしろに取扱われたということはないにしても，人目に触れにくかったのは事実である。初期の作品中，特に詩に関して人目に触れにくかったのはなぜなのであろうか。まず第一に考えられることは，彼が詩を書いた時期は1919年から1923年までの4年間という短い期間であり，その間，種々の新聞及び雑誌社の記者とか特派員生活を送っている最中に，ガートルード・スタイン (Gertrude Stein)²⁾ より創作に専念するよう助言を受け1924年より本格的な文学修業を始めたのである。後次々と小説を世に送り出したことから彼自身が彼の詩篇のいかなるものへの再録を許さなかったのではないかということである。

次に考えられることは処女出版された「三つの短篇と十の詩」がアメリ

カ以外の地で出版されたということである。更にこの処女出版物の部数がわずか300部であったということも人目に触れにくかった要因と考えられる。1922年、妻ハドリー (Hadly) とI・N・S (International News Service) 特派員を兼ねてローザンヌ (Lausanne) 平和会議取材に向う途中、リヨン (Lyon) 駅で小説1本、短篇18本、それに30の詩篇の入ったスーツケースが盗まれたという事件はあまりにも有名な話である。この原稿は永久に彼の手元には戻ってこなかったのである。

E. Hemingwayという作家がその初期に詩というものがどのような状況から生まれ、後の小説との間にどのようなつながりを持つのか等についても興味を持たれるところである。

彼は1937年6月4日、第2回全米作家会議 (The Second National Congress of American Writer) で「作家と戦争」('The Writer and War') と題した演説の中に次のような一節がある。

A writer's problem does not change. He himself changes, but his problem remains the same. It is always how to write truly and having found what is true, to project it in such a way that it becomes a part of the experience of the person who reads it.³⁾

(作家の問題は変わらぬものである。彼は自分自身が変わるが自分の問題は変わらぬままに残るものである。それはいつも、いかに真実に表現するかであり、何が真実であるかを見い出したならば、それを読む読者の経験の一部になる手法で実状を伝えることである。)

真実を表現するということは、あらゆる芸術に課せられた問題であるが、この短い文章の中には、それでも重要な彼の一つの声があるように思えるのである。手法とは作家が全身を傾ける勇気と、決意と、独創であり、作家の魂である。彼はその魂を取り落とし、見忘れ、粗末にすることを恐れたのである。

彼の詩もまた彼の青春の日々に訪れた、たった一度だけの率直な彼自身

の声で他ならなかった。

彼の詩としての処女作は1922年ダブルディーラー (Double-Dealer, New Orleans) 誌6月号に発表された四行詩「終極に」(Ultimately) である。
それは、

He tried to spit out the truth;
Dry mouthed at first,
He drooled and slobbered in the end;
Truth dribbling his chin.
(彼は真実を吐きだそうとした、
はじめはしめり気のない乾いた口で、
しまいにはだらだらとよだれになって、
真実は顎から流れ出てくる。)

というものである。その後1923年、シカゴのポエトリー (Poetry) 誌1月号に詩6篇、「さすらい」(Wanderings) を発表し、パリのリトル・レビュー (Little Review) 誌4月号に詩1篇を発表している。7月になり、パリのコンタクト (Contact) 社主、ロバート・マカルモン (Robert McAlmon; The Contact Publishing Company) が引き受けて世に出たのが「三つの短篇と十の詩」である。1918年から1923年にかけては、第一次世界大戦とギリシャ・トルコ戦争に参戦し、戦争に関する詩が書かれた年代と一致するものであり、自らの体験に基づくものであることがわかる。特に1918年7月8日夜半の出来事は、たしかに彼にとっての最初の重要な衝動であったに違いない。

当時彼は、北イタリア、フォッサルタに近いピアーヴェ (Fossalta di Piave) 前線にいた。塹壕から約百ヤードの距離を歩いていった時、突然「ごみ箱」(ash can) といわれているオーストリア軍の迫撃砲弾が落下し炸

裂した。その時の様子を友人に次のように語ったといわれている。

"I died then. I felt my soul or something coming right out of my body, like you'd pull at a silk handkerchief out of a pocket by one corner. It flew around and then came back and went in again and I wasn't dead any more."⁴⁾ (おれは本当に死んでいたよ。魂か何かが体から飛び出していく感じだったよ。絹のハンカチの片端をもって、ポケットから引っ張り出す感じでねー、魂が周りを一周して戻って来て、又体の中に入ってしまったんだ。そして生き返ったんだ。)

ミラノ陸軍病院に入院中、脚部より237の破片を摘出したというのもこの時である。

「三つの短篇と十の詩」の中から戦争に関する数篇の詩を紹介してみると、

CHAMPS D'HONNEUR

Soldiers never do die well;
Crosses mark the places——
Wooden crosses where they fell.
Stuck above their faces.
Soldiers pitch and cough and twitch——
All the world roars red and black;
Soldiers smother in a ditch,
Choking through the whole attack.

戦 場

兵士たちはそう簡単には逝かない
目印のある所に十字を書いて
倒れた所に木の十字架が

顔の上に突き立てられて
兵士たちはテントを張り、咳をし、ひきつらせて
全世界が赤と黒にわめきちらして
兵士たちは壕の中で息を殺し
総攻撃に咽びながら。

CAPTIVES

Some came in chains
Unrepentant but tired.
Too tired but to stumble.
Thinking and hating were finished
Thinking and fighting were finished
Retreating and hoping were finished.
Cures thus a long campaign,
Making death easy,

捕虜たち

ある人は鎖につながれて入って来た
後悔はしないが疲労をためて
疲れすぎてよろめきながら
思案と憎しみは終った
思案と戦いも終った
撤退と願望も失くなった
こんな長い長い戦いをいやし
死をあせらずに。

戦争というものの惨さと、政治不安と追いつめられ喘がなければならないアメリカ人は、なんらかの意味で絶望し、生きて、20世紀の運命に直面したに違いなく、過去の幻影をその20世紀の運命にぶっつけ、くだき、すべてがくだけ散るところにその運命の正体と暴力を見出して、それに対決するのを余儀なくされ、戦場での動きの中で殺され、傷ついてゆく兵士たちの心が鮮明にとらえられている。

彼の作品全般の流れる性格でもあるが、どの一つも例外なしに、あるいはなんらかの意味で戦争に結びついていることである。

悪と暴力と苦痛、生と死が一瞬の余裕を示さないかのように付着し、従って崩壊と死の影が常に這い廻っている。アルフレッド・ケイジン (Alfred Kazin) は 'On Native Grounds' という著書の中で —the Hemingway world is in a state of perpetual war. (ヘミングウェイの世界は永久に戦時下にある。) とも述べられている。言葉の面では非常に感覚的で、臭いを嗅ぐように、視覚で見るように、その上さらに聴覚が加わっている。フィリップ・ヤング (Philip Young) の言葉を借りるならば、——to have an ear the sound of human speech that is as sensitive as his nose for the smells of animals or as acute as the eyes of his father for birds.⁵⁾ (動物が臭いをかぐその鼻と同じくらい敏感で、小鳥を見つける親鳥の眼にも負けない鋭敏な耳をもち、それで人間の会話の音をとらえる耳をももっている。) のように簡潔な、よく抑制された手法である。つまり簡約されたセンテンス、接続詞 and を無造作につらねての平易な単純さ、いわば誰れもが喋るような短い構文、単語そのものの単音綴のごく日常ありふれた言葉の駆使された手法は彼の肉声としての言葉であり、それを文学という秩序の世界でまとめあげる巧みな腕をもっていたからであると思われるのである。

彼の詩についても、E. Hemingway という作家のはじまり一極言すれば、すべての人間の青春に一度は訪れ、二度とやってこない「詩の時」があ

り、詩人たちはその時を詩に書くものであって、小説にしても、随筆にしても、何を書くにしても一人の芸術家としての**はじまり**がその辺からスタートするものであると思うのである。—における詩の存在として興味深いものがある。

次の「オクラホマ」(OKLAHOMA) は彼の短篇の核をなす作品、特に「インディアン部落」(Indian Camps, 1924) と対比するときに貴重なものである他に、彼のハード・ボイルド⁶⁾ (Hard-boiled) な意識と、文体が彼の体質ないしは生理的な素質にもとづくものであることが理解できるのである。

OKLAHOMA

All of the Indians are dead
(a good Indian is a dead Indian)
Or riding in motor cars —
(the oil lands, you know, they're all rich)
Smoke smarts my eyes,
Cottonwood twigs and buffalo dung
Smoke grey in the tepee —
(or is it my myopic trachoma)

The prairies are long
The moon rises
Ponies
Drag at their pickets.
The grass has gone brown in the summer —
(or is it the hay crop failing)

Pull an arrow out:
If you break it
The wound closes.
Salt is good too
And wood ashes.
Pounding it throbs in the night —
(or is it the gonorrhea)

オクラホマ

インディアンは皆んな死んでしまった
(善良なインディアンは死んだインディアンだ)
あるいは、自動車に乗っている
(石油地帯で、おわかりのように、皆んな金持なのだ)
煙が目にしみて痛い、
ヒロハハコヤナギ（ポプラ）の枝と水牛のふん
インディアンの小屋の中の灰色の煙
(それとも、それは私の近視のトラホームのせいかな)

草原は長い
月は昇る
小馬は
つながれている杭を引っばる
夏なのに草は茶色に枯れて
(それとも、それは干し草を刈り込んでしまったせいかな)
矢を引き抜け
もしその矢を折れば

傷口は閉じる
塩もまた良いものだ
それから、材木の灰も
傷が痛んで、夜の闇に激しくなる
(それとも、それはリン病のせいかな)

この頃では取扱っていないが「襲撃部隊」を含めた上記の詩は、一連の戦争詩であり、そこに一貫する苦く、乾いた幻滅の調子には単なる流行をこえた個性的な声がひびき始めている。一種のハード・ボイルド調がすでに身についている表現（あるいは描写）と見るべきであろう。はげしい憤り、反撥を、無感動のマスクの下にかくして、さりげなく描いているのである。このように、彼の詩はE. Hemingwayという偉大な作家あつての詩という人もいるが、全く無駄のない詩の構成と、言語の的確さは非凡であり、E. Hemingwayを愛読する者にとっては、彼の詩、それとも彼の最も初期に書かれたこれらの詩篇を読むことは興味のつきないものである。

以上の3篇の他に、「機関銃手」(Mitragliatrice)、「襲撃部隊」(Riparto d'Assalto)、自殺を取扱った「モンパルナス」(Montparnasse)、戦争以外の詩では「油っぽい天気」(Oily Weather)のように露骨に性的なイメージをよみこんだ作品、また「T・ルーズベルト」(T. Roosevelt)のように政治家諷刺もの、他に「青春とともに」(Along with Youth)と、「章の見出し」(Chapter Heading)である。

しかしこの「三つの短篇と十の詩」以外にも数篇の詩が、アメリカの雑誌「ダブルディーラー」や、ドイツの同人雑誌「デア・クヴェルシュニット」《横断面》(der Querschnitt)に発表されている。その中から次にあげる詩は1920年代という時代が、若者たち、ここでは特にE. Hemingwayにどのように感じとられていたかを良く物語っている詩であると思う。彼等は刺激と、たえず動きという状態を求めて、ヨーロッパに行き、戦争にも参

加したのであるが、その背後にはこの作品によみとれるような時代の流れのようなものがあったことは疑うこともできないのである。

THE AGE DEMANDED

The age demanded that we sing
And cut away our tongue.

The age demanded that we flow
And hammered in the bung.

The age demanded that we dance
And jammed us into iron pants.

And in the end the age was handed
The sort of shit that it demanded.

時代は要求した

時代は私たちが唱うことを要求した
そして私たちの舌を切取った。

時代は私たちに流れることを要求した
そして私たちの口にハンマーで栓をした。

時代は私たちに踊ることを要求した
そして私たちを鉄のパンツに押しこんだ。

そして最後に時代は手を出した

その時代が要求した一文の価値のないものまで。

戦争に参加することにより、前記の詩で明らかなように少なくとも彼は一種のダダイスティック (dadaistic)⁷⁾ な気分から目覚めるのである。

一方、カーロス・ベーカー (Carlos Baker) によると E. Hemingway は 1921 年「トロント・スター」紙に送った記事の一つに、結婚の贈物 (妻、ハドリーに対する) についての諷刺詩が掲載されていたという。それは、

Three traveling clocks

Tick

On the mantelpiece

Comma

But the young man is starving.⁸⁾

3 個の旅行時計が

チックタックと

暖炉の上で

コンマ

だけど青年は餓死しかけている。

というものであり、餓死という表現は彼一流の誇張である。さらにベーカーは E. Hemingway について、—— As Ernest made new friends, he shed some older ones. The quarrel with Kenley Smith which had embittered the last days in Chicago led to an estrangement between his brother Bill and Ernest, the closest of cronies Since 1916.⁹⁾ —— (アーネストは新しい友達を作ると同時に、古い友人を捨てていった。シカゴで最後の日々

を苦渋に満ちたものにしたケンリー・スミスとの口論は、1916年以来の無二の親友であった彼の弟ビルとアーネストの間をも疎遠にしてしまった。) ということである。そこで彼はすべての罪を見当はずれな相手になすりつけた一篇の醜惡な詩を作った。それは、

"Blood is thicker than water, "

The young man said

As he knifed his friend

For a drooling old bitch

And a house full of lies¹⁰⁾.

「血は水よりも濃いものだ」

と青年は口ばしり

彼は彼の親友を短刀で刺したのだ

洩たらしの意地悪女と

嘘ばかりの一家のために

この頃までに彼は「スター」紙にジェノバ会議関係の記事を15篇も送っており、従って、そろそろ自分の詩と散文の実験的な仕事に立ち帰ってもよい頃だと感じていたようである。6月号の「ダブルディーラー」誌に、前に述べた彼の最初の詩「終極に」が発表されているが、その一ヶ月前の5月、近々詩集を出版する予定であるとの解説つきで、彼の寓意的物語「神のしぐさ」(A Divine Gesture) を発表したことに、彼は大変気をよくしたということであり、一冊の詩集に収めるほどでないにしろ、彼がいくつかの詩を書きためていたのは事実のことであったようである。彼はそのうちの5~6篇を集めて、シカゴの「ポエトリー」誌への掲載かたを考慮して欲しいと頼みこんだといわれる中の一編は彼のタイプライターを機関銃に喩

えている。

The mills of the gods grind slowly;
But this mill
Chatters in mechanical staccato,
Ugly short infantry of the mind,
Advancing over difficult terrain,
Make this Corona^{1 2)}
Their mitrailleuse.^{1 1)}

神々のうすはゆっくり廻る
だけどここのうすは
機械的な断音で早口にしゃべる
醜い、ずんぐりした頭の歩兵たちは
困難な地帯を越えて進む
このコロナ・タイプライターを
彼等の機関銃として

この詩は「三つの短篇と十の詩」の中の詩篇第一番目に記されているものである。次のもう一篇はミシガン州における彼の少年時代を回想したものである。

A porcupine skin,
Stiff with bad tanning,
It must have ended somewhere.
Stuffed horned owl
Pompous

Yellow-eyed;
Chuck-well-widow on a biased twing
Sooted with dust.
Piles of old magazines,
Drawers of boys' letters
And the lines of love
They must have ended somewhere.
Yesterday's Tribune is gone
Along with youth
And the canoe that went to pieces on the beach
The year of the big storm
When the hotel burned down
At Seney, Michigan.¹³⁾

やまあらしの毛皮
下手ななめし方で
それはどこかで終ったに違いない。
はくせいのフクロウ
横柄で
黄色い眼で
ねじれた小枝の上の夜タカ
埃まみれの
古雑誌の山
少年たちの手紙
恋文が詰った言葉
それらはどこかで終ったに違いない
昨日の「トリビューン」紙はすでにない

青春とともに
浜辺で砕け散ったカヌーも
あの大きな嵐の年に
ホテルが焼け落ちた
ミシガンのシーニークの町で

「デア・クヴェルシュニット」誌に載った詩は、どれも彼の名声を高めるようなものではなかったようである。しかし彼がやがてその雑誌の読者の間で〈詩人ヘミングウェイ〉として知られるようになったのは、何も要求しない時代の皮肉の一つであったのである。「三つの短篇と十の詩」を対象にして、彼の詩は特に重要なものではないと評されながらも、散文の方は極めて優れたものとしてエドマンド・ウィルソン¹⁴⁾ (Edmund Wilson) の目にとまり、ガートルード・スタイン同様、彼は素朴な言葉を用いて深い情緒と複雑な心の諸相を伝える特殊な技術を編み出したのである。

彼の詩篇はまた同じ時期に書かれた「春の奔流」(The Torrents of Spring, 1926) と同時にあわせ読むと一層興味深いものがある。つまり、ミシガンは「春の奔流」の舞台となった場所であり、彼が幼年時代から毎夏連れられていった北ミシガンの一般の別荘の近くであり、いわば幼な馴染みの土地である。「われらの時代に」(In Our Time) の冒頭の数篇、また最後の「大きな二つの心臓の川」(Big Two-Hearted River, 1925) は、いずれもこの北ミシガンが舞台となっているのである。第一次大戦で重傷を負った彼が帰国してからもしばしば訪れている場所の一つである。この「春の奔流」の中で、ヨギ・ジョンソン (Yogi Johnson) が冒頭に間近かに寄ってきた春の気配を嗅ぎつけようとするように窓から眺める場面が描かれている反面、その戦争を批評して、—War had been to him like football. American football. What they play at the college. Chap. II (戦争というものは自分にとってフットボールみたいであった。アメリカン・フット

ボールのような、大学でやっているような。)という一文がある。これは決して戦争をフットボールのように競技として眺めたいという意味では決してない。それは彼がアメリカン・フットボールのセンターをやっていた時に感じた「緊迫した不安」と「非情」とを戦争そのものから持ち帰った意味での表現なのである。戦争は極めて個人感情のものであったとも言う。20世紀の運命が戦争そのものに直結され、その中で死に、又よみがえり、孤独に歩まなければならない、ストイックな忍耐力をもって死をながめ、死の恐怖を知るのである。またこの作品はE. Hemingwayが親しく接触した作家の一人で、シカゴ時代に知り合ったアンダーソン¹⁵⁾ (Sherwood Anderson) のパロディ的性格を強くもっていることが、彼の文学的出発に対する強い影響を物語るものである。しかし彼は全面的に傾倒していたわけではなく、やがては批判的になるのである。ヤング (Philip Young) の言葉をかりるならば、—its author's independence of his old friend Anderson, and of the whole Anderson brand of sentimental primitivism¹⁶⁾—(作者が旧友アンダーソン、ならびに感傷的原始性というアンダーソンの烙印から完全に独立したこと)を宣言し、He had gotten rid of many things by writing them.¹⁷⁾ (彼は今までにも、たびたび書くことによっていろんなものを身内から追放してきた。)のようにアンダーソンから受けた体内の毒気を吐き出したのである。

例えば「武器よさらば」(A Farewell to Arms)で戦争に参加した若者たちの信条が、どのように発展し、変化していったかを主人公のフレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) に託してE. Hemingwayが第3篇「カポレットからの退却」(retreat from Caporetto) 第27節の中で戦場描写としては強く実感にあふれた見事な個所で、—“It can't win a war but it can lose one.” “We won't talk about losing. There is enough talk about losing. What has been done this summer cannot have been done in vain.”—I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and

sacrifice and the expression in vain.— and I had seen nothing sacred, and the thing that were glorious had no glory and the sacrifices were like the stockyards at Chicago if nothing was done with the meat except to bury it. There were many words that you could not stand to hear and finally only the names of places had dignity. —Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow were obscene beside the concrete names of villages, the number of roads, the names of rivers, the number of regiments and the dates.¹⁸⁾ (「そんなことじゃ戦争には勝てないんだ。敗けてしまおうぞ。」「敗ける話なんか止めよう。敗ける話はこりごりだ。この夏やったことが無駄にやったことになるはずがないんだよ。」——神聖だとか、栄光だとか、犠牲だなんていう言葉や、効なくしてなんて言い廻しには、いつも当惑をおぼえるんだ。——しかも神聖なんていうものに今までお目にかかったこともなく、栄光なんていうものに栄光のあったためしがないんだ。しかも犠牲とはシカゴの屠殺場と似たものであって、その肉を処分せずに埋葬するという違いがあるだけだ。世間には聞くに堪えない言葉がたくさんあるんで、しまいには場所の名前だけしか威厳がもてなくなるんだ。——栄光、名誉、勇気、あるいは神聖といった抽象名詞は、村の名前、道路の番号、河川の名前、連隊の番号、日付などの具体名詞を並べると、あまりにも猥雑なんだよ。)と語らせているが、彼等にとって、はじめは抽象的な何かであったが、それに代って参加することにより現実性をおびてきたことは当然として、傷を受けて退却するに至っては、戦争はもはや彼自身の一部として彼の中に入りこんでいたのである。

最後に紹介する詩は「女流詩人一脚注つき」(THE LADY POET WITH FOOTNOTES der Querschnitt, 1924) というものである。この作品にはE. Hemingwayの女性観があらわれている。女性に対する冷たさは彼の作品に一貫したものがあるが、特に自我の強いインテリ風の女性を憎悪する傾向にあり、この詩にも幾人もの特定の女性詩人を目標にした、いささか度のすぎた、どぎつすぎるほどの侮蔑があり、軽妙な機知というよりはむしろむき出しの悪意なるものが目立っている作品である。

One lady poet was a nymphomaniac and wrote for Vanity Fair.⁽¹⁾

One lady poet's husband was killed in the war.⁽²⁾

One lady poet wanted her lover but was afraid of having a baby. When she finally got married she found she couldn't have a baby.⁽³⁾

One lady poet slept with Bill Keely, got fatter and made half a million dollars writing bum plays.⁽⁴⁾

One lady poet had enough to eat.⁽⁵⁾

One lady poet was big and fat and no fool.⁽⁶⁾

(1) College nymph. Favorite lyric poet of leading editorial writer N.Y. Tribune.

(2) It sold her stuff.

(3) Favorite of State University male virgins. Wonderful on unrequited love.

(4) Stomach's gone bad from liquor. Expects to do something really good soon.

(5) It showed in her work.

(6) She smoked cigars all right, but her stuff was no good.

ある女流詩人は色気ちがいで、「ヴァンティ・フェア」誌に詩を書いた。⁽¹⁾

ある女流詩人の夫は戦死した。⁽²⁾

ある女流詩人は恋人を欲しがった。が赤ん坊ができるのが心配だった。彼女がとうとう結婚したその時は、赤ん坊が生めないことがわかった。⁽³⁾

ある女流詩人はビル・キーリーと夜を共にした。だんだんふとり、安っぽい劇を書いて50万ドルもうけた。⁽⁴⁾

ある女流詩人は十分な食料をもっていた。⁽⁵⁾

ある女流詩人は大女で、デブで、ばかではなかった。⁽⁶⁾

(1) カレッジ出の妖女。「ニューヨーク・トリビューン」紙の一流のライターで人気のある抒情詩人。

(2) そのため彼女の作品がうれた。

(3) 州立大学の童貞たちのお気に入り。失恋について語るすばらしさ。

(4) 酒で胃を悪くした。まもなくすばらしい仕事をしようと期待する。

(5) そのことは彼女の仕事にあらわれている。

(6) 彼女は葉巻を吸った。作品はよくなかった。

E. Hemingwayの詩がアメリカ現代詩の中で名詩であったのかどうかは詩の評論家たちに委ねるにしても、彼は始め詩を書き、やがて小説を中心に活動して来た過去の人であるが、詩をある入れ物に例えるならば、詩という入れ物には盛り切れない多くのものをもっていて、詩をはなれて散文におもむくべくしておもむいたという感じが受けとれるのである。

注 1) アメリカで第一次世界大戦から最も大きな影響を受けた「戦争の世代」をさしている言葉。Gertrude Stein(注2参照)はこの世代の者について‘You are all a lost generation.’といったとE. Hemingwayは「戦争の世代」の姿を如実に描いた小説「日はまた昇る」(The Sun Also Rises, 1926)の中で引用しているが、彼等は1890年代の中頃に生まれ、第一次大戦に際して軍隊に加わり、直接・間接に戦争を体験したことから人生に方向を見失い、戦後自国に安住することができず、‘exiles’となって主としてフランスのパリに集まり、社会と政治に背を向け、フランス文学から多くのものを学びながら、さまざまな文学上の実験を試みることによって自己を生かそうとした。幻滅感に耐え得た者は戦後の混沌の時代を生き抜き、自国文学の伝統

を再発見すると同時に、それぞれ自己の文学の世界を見出し、不況が始まった1920年代の末頃までは、その大半が帰国して‘exiles’であることをやめた。この世代に属する者に、Malcolm Cowley, E. E. Cummings, Dos Passos, Faulkner, Hemingway, Moeleish, Edmund Wilson, などがあり、これらの作家が出て始めてアメリカ文学は、第19世紀文学の伝統を脱し、第20世紀文学の性格を持つに至った。(英米文学辞典, 研究社, p.618~619)

2) (1874~1946)。アメリカの女流詩人, 小説家。Pennsylvania州 Alleghenyに生まれ, 少女時代をCalifornia州で過ごしRadcliffe College (Harvard Uni., Massachusettsの女子校, 男子校はHarvard Collegeである。—執筆者加筆)に入学, 在学中にWilliam James (1842~1910, pragmatism, つまりこの学説の重要な点は, われわれの行動経験の真偽論にある。ゆえにそれは, 単なる常識的実用主義ではなく, radical empiricismの主張に基づき, 実在論的な性質を有していることを唱えたアメリカの哲学者・心理学者。—執筆者加筆)から心理学を学んだ。卒業後1902年イギリスに渡り, しばらくロンドンにあってイギリス文学に親しみ, のちパリに居をかまえてからはほとんど帰国することなく, 結局, expatriateとして後半生を送り, フランスで他界した。その間JamesやBergson (1859~1941, 現代の主知主義に反対し, 直観主義を主張, 真の実在は純粹持続であり, 創造であり, 生命であるから, 理知でなく直観によってのみ把握されるところとしたフランスの哲学者。—執筆者加筆)から多くのものを学んで, 散文にあっては刻々と過ぎて行く現在の瞬間を捕えねばならぬとして, 従来のplotの考えを退け, くり返しや, variationを用いて流動感を伝えようとし, 詩にあっては言語の意味よりもむしろ, その音の効果を連想し重ねて, 事物のもつ時をこえた価値を伝えようとするなど, 大胆な言語革命を試みたが, その文体上の実験に見られるモダニズムは, 作品を通してはもちろん, 彼女のサロンでの談話を通して, S. Anderson, E. Hemingwayらをはじめ, 若い世代に大きな影響を与えた。主な作品をあげれば, 小説に3人の女性を描いたThree Lives (1909), Lucy Church Amiably (1930), Ida (1941), 詩にTender Buttons (1914), Geography and Plays (1922), Useful Knowledge (1928)があり, ほかに一家の記録The Making of Americans (1925), 自叙伝The Autobiography of Alice B. Toklas (1933), 評論, 講演集Composition as Explanation (1926), Narration (1935), Lecture in America (1935), 第二次大戦体験記Wars I Have Seen (1945), オペラFour Saints in Three Acts (1934)などがある。(英米文学辞典, 研究社, pp.1036~1037)

3) The Writer in a Changing World. p. 69

4) M. Cowley; ‘Mister Papa’ Life, xxvi

5) Philip Young: Hemingway p. 175

- 6) そもそも「ハード・ボイルド」とは「黄味が固くなるまでゆでた」という意味の卵にかかる形容詞である。

語感がよいためか1920年代のアメリカでは「非情な、心が硬くなった」という意味で卵以外のものに関して使われていたようである。誰がこの語を彼の文体としたかは未詳であるが、彼の最初のベストセラー作品「日はまた昇る」のジェイク(Jake)に、たしかに昼間ならば何につけハード・ボイルドでいるのは簡単であるが、夜となるとまた別のものだ。と言わせたのが出所と考えられている。文学的な「ハード・ボイルド・スタイル」は訳せば「非情な文体」となるのであるが、一般的な意味としては、「感傷的でない」とか「情をぬきにした」文体といわれて、彼について用いられると、「人間の死や暴力を、情緒で色づけすることなく、即物的に描く文体」ということになる。従ってこの「ハード・ボイルド・スタイル」とは人間を限りなく物に近づけながら、同時に物から人間を守る働きをする文体、本質的に柔らかなものである人間存在を外界から防衛する鎧となる文体とも言えるものである。

「ハード・ボイルド」がうまい形容であるのは「ソフト・ボイルド・エッグ」(半熟卵)を割った時に、ドロリとでてくる黄味をこの人間存在の柔らかな部分になぞらえることができるためである。

彼の文体において、言葉がもののハードさを持ち、人間存在がものに近づいている。つまり実はその文体の裏にある感情が余りにも柔らかすぎ、無定形で、余りにも豊かで溢れんばかりであるが故に、それを押し殺す必要があったということである。

- 7) Dadaism, 未来派の最極端を示すもので、殆んど芸術上の虚無主義ともいべきものである。1916年スイスのチューリッヒ(Zurich, Switzerland)で起った旧来の価値、秩序、組織、法則を破壊し、虚無的快楽を追求する思想である。
- 8) Ernest Hemingway: A Life Story by Carlos Baker. A National General Company. p. 109
- 9) Ibid. p. 116
- 10) Ibid. p. 117
- 11) Ibid. p. 119
- 12) 22回目の誕生日に妻ハドリーから贈られたもの。
- 13) Ibid. p. 119
- 14) (1895~1972)アメリカの批評家。

New Jersey州出身Princeton大学卒業。第一次大戦に出征。戦後New York Sun (1919~20)に関係したのに始まり、Vanity Fair (1920~1), New Republic (1926~31), New Yorker (1944~8)などの諸雑誌に関係する。その間第19世紀フランスの歴史批評, New Criticism, 左翼批評をそれぞれ取り

入れ、さらに精神分析の方法に学んだ批評を行ない、批評界で特異な地位を占めるに至った。主な著書に、象徴主義の伝統をたどった *Axel's Castle* (1931), 社会批評 *The American Jitters* (1932), Henry James (1843~1916), (アメリカの小説家・批評家—執筆者加筆)らを論じた *The Triple Thinkers* (1938), ヨーロッパの革命思想の歴史を扱った *To the Finland Station* (1940), C. Dickens (1812~70, イギリスの小説家—執筆者加筆)論などを含む *The Wound and the Bow* (1941), カルフォルニア州出身の作家たちを取り上げた *The Boys in the Back Room* (1941), それぞれ雑誌に発表した文章を集めた *Classics and Commercials* (1950), *The Shores of Light* (1952), *A Piece of My Mind* (1956)がある。—英米文学辞典, 研究社, p. 1209

15) (1876~1941), アメリカの小説家。

Ohio州出身。貧しい馬具商を父として生まれ、正規の教育はほとんどうけず、雑多な仕事に従ってからペンキ工場を経営、成功を収めたが、それに満足できず、作家を志してシカゴに出、Dell(アメリカの小説家・評論家。—執筆者加筆)や Carl August Sandburg(シカゴの鉄と煤煙, 中西部の大草原, また民衆を歌う社会主義的人道主義のアメリカの詩人—執筆者加筆)らと交わりながら創作を始め、1916年自伝的要素を多分にふくむ最初の長編 *Windy McPherson's Son* を発表、第二作 *Marching Men* (1917)のあと中西部の田舎町に住む人々の内面生活に解剖のメスを入れた短編集 *Winesburg, Ohio* を出して、新興アメリカ文学を代表する一人と認められた。次いで手工業時代から機械時代へと移るアメリカの姿を写した *Poor White* (1920), 抑圧のない黒人の健康な笑いと欲求不満に悩む白人の無気力な生活とを対比させて、D. H. Lawrence (1885~1930, 近代資本主義文明によってひきおこされた人間性の喪失に反逆して、原始的生命への復帰を唱え、その手段として理想的な性関係の確立を探求しつづけ、この思想を独自の詩的・象徴的官能描写によって表現したイギリスの小説家・詩人—執筆者加筆)の作風を思わせる *Dark Laughter* (1925), 短編集 *The Triumph of the Egg* (1921), *Horses and Men* (1923), 自叙伝 *A Story Teller's Story* (1924)などを発表。1925年以後はVirginia州 Marionに定住、地方紙を買収してその編集にたずさわる一方、長編、評論その他を出し、特に恐慌後強い社会的関心を示しはしたが、作品としては自叙伝 *Tar* (1926), 短編集 *Death in the Woods* (1933)のほかさして見るべきものがなく、1930年代にはすでに過去の作家と見なされるに至った。しかし清教徒風な禁欲主義に反対して人間を肉体の面から見、短編小説をプロットを中心とする従来の伝統から解放し、さらに口語体を基にして率直素朴で抒情ゆたかな文体を作り出すなど、自国文学に新しい空気を導き入れ、Hemingwayや Faulknerらの世代に影響を与えた功績は大きい。なお *Memoirs* (1942), *Letters* (1953)が死後出版された。—英米文学辞典, 研究社, pp. 26~27

- 16) Ernest Hemingway by Philip Young. p. 54
- 17) "The First 49 Stories" by E. Hemingway. "Fathers and Sons" Jonathan Cape p. 409
- 18) "A Farewell to Arms" by E. Hemingway, Scribners. pp. 184~5

文中の訳はすべて筆者の訳による。

E. HEMINGWAY 年譜

1899年 7月21日朝、アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway) はイリノイ (Illinois) 州シカゴ (Chicago) 郊外、オークパーク (Oak Park) に長男 (第二子) として生まれる。六人兄弟で、姉一人 (Marcelline), 妹三人 (Ursula, Madelaine, Carol), 弟一人 (Leicester Clarence)。父クラレンス・エドモンズ・ヘミングウェイ (Clarence Edmonds Hemingway) は南北戦争の復員軍人アンソン・T・ヘミングウェイ (Anson T. Hemingway) の長男で、狩猟や魚釣りや料理の趣味をもった真面目な信心深い医者であり、特に遠眼が利き小鳥射ちの妙手として知られる。母グレース・ホール・ヘミングウェイ (Grace Hall Hemingway) は音楽を愛好し、独立制教会 (the First Congregational Church) 歌手としても活躍し、自宅にステージ付音楽室を設け時々演奏会を催していた。又絵を描く教養ある婦人であった。

1901年 2才。父より釣り道具の正しい使い方を教えられ、母より音楽を聞かされる。このころミシガン (Michigan) 州北部ワルーン湖畔 (Waukegan Lake) に別荘をもち、一家はしばしばここに避暑にやって来て、魚釣りや狩猟をしながら自然を楽しんだ。

1903年 4才。四度目の誕生日に初めて父とワルーン湖畔の奥へ魚釣りに出かける。秋、アニー・L・ハウ (Annie L. Howe) のイングルサイド幼稚園 (Ingleside Kindergarten) に入る。

ヘミングウェイの詩

1905年 6才。5月10日、ヘミングウェイを大変可愛がってくれた母方の祖父
(明治38年) 父アーネスト・ホール(Ernest Hall)死亡する。

1909年 10才。父より大人用の猟銃を与えられ、ワルーン湖畔の野外生活を
(明治42年) 楽しむ。また、父とインディアン部落(Ojibway Indian)を訪れる。

1910年 11才。母とマサチューセッツ(Massachusetts)の海岸から30マイル
(明治43年) の沖合にある島で、捕鯨の中心地であったナンタケット(Nantucket)
に旅をし、初めて大西洋を見て海水浴に興じる。

1911年 12才。四女キャロルの誕生パーティーで祖父アンソンより20口径の
(明治44年) 猟銃を贈られる。

1912年 13才。学校劇「ロビンフッド」に出て初めて舞台を経験する。
(明治45年)

1913年 14才。ホームズ・グラマー・スクール(Holms Grammer School)を
(大正2年) 卒業。秋、オーク・パーク・ハイスクール(The Oak Park and
River Forest Township High School)に入学。水泳の選手をやり、ラ
イフルクラブ員にもなる。
シカゴボクシングクラブに入所する。猛練習の為に二年後左眼負傷
する。

1916年 17才。ボクシングに熱中しシカゴに通う。学校週刊誌「ぶらんこ」
(大正5年) (The Trapeze) を編集、文芸誌「白紙」(The Tabula) に寄稿。又
体格も背もフットボール選手の条件にかなって選手となる。水球の
キャプテンもつとめながらカヌー乗りも始める。一方孤独で競争心が
旺盛で多芸秀才として知られるが、この年三度も家出をしている。

1917年 18才。友人ロイ・オルスン(Roy Ohlsen)とイリノイ川(Illinois
(大正6年) River)にカヌーの旅に出る。6月オーク・パーク・ハイスクールを
卒業。すでに4月、アメリカは第一次世界大戦に参加。兵役志願を

したが父の反対にあう。父は姉マルスリーン同様オベリン大学 (Oberlin College) に入することを希望する。9月、カンザス・シティー (Kansas City) に赴き、そこで材木業を営んでいる叔父タイラー・ヘミングウェイ (Tyler Hemingway) によって、「カンザス・シティー・スター」 (Kansas City Star) 紙の編集長ヘンリー・J. ハスケル (Henry J. Haskell) に紹介され、スター紙の記者として入社する。

1918年 (大正7年) 19才。4月、カンザス・シティーに住んでいる同僚セオドル・ブラムバック (Theodore Brumback) とスター社在社7ヶ月でやめ、イタリア軍付き赤十字軍要員の募集に応募する。5月、ヨーロッパに渡り、パリに赴く。フランス軍配属赤十字野戦病院輸送車の運転手としてイタリア戦線に出る。7月(8日)北イタリア前線フォッサルタ・ピューヴェ (Fossalta di Piave) でオーストリア軍の迫撃砲弾の炸裂にあい、脚部に227ヶ所の負傷を負う。救急車で一時フォルナシー (Fornaci) 付近の学校に運ばれ、後トレビソ (Treviso) 近くの戦線病院で手当を受け、5日間過ごす。

7月(15日)病院列車でミラノ (Milano) に向かう。ミラノ陸軍病院に3ヶ月間入院。8月中旬、看護婦アグニス・ハンナ (Agnes Hannah) と激しい恋におちいる。10月退院後、中尉待遇としてイタリア歩兵部隊に所属する。11月休戦に入る。[1921年11月20日、イタリア政府よりこの時の戦功によりイタリア陸軍第二の勲章 (Medaglia al Valore Militare) と年金約50ドル、及び勲功章 (Croce di Guerra) をシカゴで授与された。]

1919年 (大正8年) 20才。1月21日戦争の英雄として祝福され雪に覆われた故郷に復員。アメリカ最初の傷痍軍人として新聞に宣伝され母校で講演などを行う。秋から冬にかけてワルーン湖畔ペトスキー (Petskey) で静養する。怠情のため母親から叱責されて落付かない日々が続くが、真剣に習作をはじめ。しかし原稿がひとつも売れない。戦傷も加わった原因で夜間不眠症に悩んだ。

1920年 (大正9年) 21才。1月、トロント (Toront) に行き、父の知人ラルフ・コナーブル (Ralph Connable) の紹介で〈トロント・スター・ウィークリー〉 (Toront Star Weekly)、及び〈トロント・デイリー・スター〉 (To-

ront Daily Star)に関係し、読み物記事を書く。5月、アメリカに戻り、その秋シカゴに赴き、アメリカ消費組合(Cooperative Society of America)の機関誌(Co-operative Commonwealth)を編集。冬、シャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson)と知り合い、多大の影響を受ける。

1921年 (大正10年) 22才。春、経営不振のため退社、ふたたび〈トロント・スター・ウィークリー〉に関係し、署名寄稿家となる。9月(3日)、セントルイス(St. Louis)出身のエリザベス・ハドリー・リチャードソン(Elizabeth Hadly Richardson)と結婚。カナダのオンタリオ(Ontario)州トロントに住む。12月(8日)前記二紙のヨーロッパ特派員としてスペイン経由パリに赴く。

1922年 (大正11年) 23才。3月、アンダーソンの紹介状をもってパリに住むガートルード・スタイン(Gertrude Stein)を訪問し、またエズラ・パウンド(Ezra Pound)とも知り合いになる。ジェノア経済会議(Genoa Economic Conference)の報道のためイタリアに赴く。6月まで滞在、のち北イタリア旅行(4週間)中ミラノの病院や負傷したフォサルタ村を訪ねた。9月下旬ギリシャ・トルコ戦争(Greco-Turkish War)報道のため9月30日、コンスタンチノーブル(Constantinople)に赴く、そして11月パリ到着後I.N.S(the International News Service)特派員を兼ねてローザンヌ(Lausanne)平和会議取材した。12月、妻ハドリーがローザンヌに行く途中、リヨン(Lyon)駅で、小説1本、短編18本、それに30の詩篇の入ったスーツケースを紛失する。ニューオーリンズ(New Orleans)で出版されている〈ダブル・ディーラー〉(Double-Dealer)誌の5、6月号にアメリカの雑誌に発表された最初の作品、短編「神の身振り」(A Devine Gesture)、詩篇「終極に」(Ultimately)を発表した。

1923年 (大正12年) 24才。ローザンヌ会議後イタリアのラパルロ(Rapallo)に旅し、エズラ・パウンドやロバート・マカルモン(Robert McAlmon)〈スリー・マウンテンズ社主〉と親交を深めた。詩6篇、「さすらい」(Wanderings)をシカゴの〈ポエトリー〉(Poetry; A Magazine of Verse)誌1月号に発表し、スケッチ6葉、詩1篇をパリの〈リトル・レビュー〉(Little Review)4月号に発表。4月、ルール(Ruhr)、フ

ランクフルト (Frankfurt) 方面に旅行し、6月ルール地方占領事件取材を果たしてパリに戻る。7月、「三つの短篇と十の詩」(Three Stories and Ten Poems)をパリのコンタクト(Contact)社より処女出版する。9月、ガートルート・スタインより創作に専念するよう助言を受け、パリ在住の生活費を得るためと、妻の出産のため一時トロントに戻った。10月10日、長男ジョン(John)誕生。12月に〈トロント・デイリー・スター〉を退社している。

1924年 (大正13年) 25才。トロント在住4ヶ月後の1月、パリに戻り、本格的な文学修業をはじめ。パリ在住のジョン・ドス・パソス(John Dos Passos)、ジェームズ・ジョイス(James Joyce)などと親しく交際する。冬スイス、春北イタリア、夏スペインと各地を旅行。特にスペインのパンプローナ(Pamplona)で闘牛を見物し興味をもつ。この年の1月に創刊された〈トランスアトランティック・レビュー(Transatlantic Review)〉—編集長はフォード・マドックス・フォード(Ford Madox Ford)—の編集員となり、4月号に短篇を発表。秋ドイツの前衛雑誌〈クヴェールシュニット〉(Der Querschnitt)に詩4篇発表。小品集「われらの時代に」(In Our Time)32頁18篇(翌年米国版に収録)をパリの〈スリー・マウンテンズ・プレス〉(The Three Mountains Press)から刊行する。

1925年 (大正14年) 26歳。1月〈トランスアトランティック・レビュー〉廃刊。〈クヴェールシュニット〉2月号に詩1篇発表。5月パリでマルカム・カウリー(Malcolm Cowly)やF・スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald)とも親しく交際する。新しく創刊された〈ジス・クォーター〉(This Quarter)に関係し、短篇「大きな二つの心臓の川」(Big Two-Hearted River)を発表。10月5日、短篇集「われらの時代に」をアメリカで処女出版。前年の短篇18のうち16を中間章として短篇15から成っている。

1926年 (昭和元年) 27才。2月出版交渉のためニューヨークに赴く。5月28日「春の奔流」(The Torrents of Spring)をスクリブナーズ(Charles Scribner's Sons)社より刊行。印税15%、前金1500ドルで契約が成立し、ヘミングウェイ作品は一生この社より出版される。7月、一幕劇小品「今日は金曜日」(To-day Is Friday)発表後、9月、前年知り合ったヴォー

グ(Vogue)誌のパリ駐在記者ポーリン・プファイファー(Pauline Pfeiffer)との愛が発覚し、ハドリーは100日間三者別居生活をし、それでもアーネストとポーリンの愛がつづくなら離婚する条件を提示し合意書に署名する。ポーリンは帰米し、夫婦は別居した。10月22日「日はまた昇る」(The Sun Also Rises—別名 Fiesta)を出版し、“失われた世代”の作家としての地位を確立した。

1927年 (昭和2年) 28才。3月、ハドリーと正式離婚。「殺し屋ども」(Killers)を<スクリブナーズ・マガジン>(Scribner's Magazine)3月号に発表。5月10日、パリのカトリック教会でポーリン・プファイファーと再婚。10月14日、第二短篇集「女のいない男たち」(Men Without Women)出版。ヘミングウェイはポーリン・プファイファーの感化を受けてカトリックに改宗。

1928年 (昭和3年) 29才。4月パリより帰米し、フロリダ(Florida)州最南端キー・ウェスト(Key West)を初めて訪問し居住。1938年まで10年間ここに住む。6月28日次男パトリック(Patrick)出生。11月19～20日、フィッツジェラルド夫妻と共にプリンストン大学(Princeton Univ., New Jersey)で行われたイェール大学(Yale)対プリンストン大学の対抗フットボール大会を観戦。12月6日、父がオーク・パークでピストル自殺する。3月パリで起稿した「武器よさらば」(A Farewell to Arms)を8月末ワイオミング州のビッグホーン(Big Horn, Wyoming)で脱稿し、書き直しにとりかかる。

1929年 (昭和4年) 30才。4月、4人家族と妹マダリン、ハバナ(Havana, Cuba)から船でパリに戻る。「武器よさらば」を<スクリブナーズ・マガジン>5月号から10月号にかけて連載し、9月27日に出版。ベストセラーになり1ヶ月で28,000部の売れ行きであった。作家としての地位を固める。10月、ニューヨークの株価が大暴落し大恐慌となり一大不況期がはじまる。

1930年 (昭和5年) 31才。2月、再びキー・ウェストに帰る。11月、ドス・パソスと一緒に旅行中、モンタナ州(Montana)で自動車事故(車が溝に落ち右腕骨折)で負傷、年末までビルングス(Billings)で入院加療する。

- 1931年 (昭和6年) 32才。5月スペインに旅行し、闘牛に関する書「午後の死」(Death in the Afternoon)の執筆をはじめ。11月12日三男グレゴリー(Gregory)が次男パトリックの時と同様帝王切開で出生。
- 1932年 (昭和7年) 33才。4月から5月までハバナでの釣りの旅がつづく。7月、モンタナ州の牧場で釣りと言を10月までやった。9月26日に闘牛書「午後の死」出版。ヘミングウェイは自作の中で大不況下での政治、経済の主要な問題を回避していることから、左翼作家の詰問をうける。
- 1933年 (昭和8年) 34才。キー・ウェストで目方468ポンドの大魚マーリン(Marlin)を釣る。9月、マドリッド(Madrid)に赴く。10月27日第三短篇集「勝者には何もやるな」(Winner Take Nothing)出版。11月夫人プファイファー同伴でマルセイユ出航ケニヤ(東アフリカ)に、英領ケニヤ植民地モンバサ(Mombasa)より自動車にて西進、タンガニイカ(Tanganyika)に入り、12月中旬セレンゲッティ平原(Serengetti Plain)突端のセレンイ河(Serene River)附近まで足を延ばし翌年2月まで狩猟旅行をつづける。「武器よさらば」映画化なる。(パラマウント社、ゲーリー・クーパー主演)
- 1934年 (昭和9年) 35才。1月、アフリカ旅行の途中、アメーバ赤痢にかかる。回復後、再び狩猟旅行をつづけ、4月3日帰国。アフリカ旅行について、「アフリカの高原」(The Highland of Africa)と仮題し執筆をはじめ。一方自家用の漁船ピラー(Pilar)号(百馬力機関船)を購入し魚釣りを楽しむ。
- 1935年 (昭和10年) 36才。10月25日アフリカ旅行記「アフリカの緑の丘」(Green Hills of Africa)出版。
- 1936年 (昭和11年) 37才。7月、スペイン内乱勃発。政府軍援助資金4万ドルを個人名義で調達し、積極的な医療援助に努める。〈エスクワイア〉(Esquire)3月号に「持つと持たぬと」(To Have and Have Not)第2部と「商人の帰還」(The Tradesman's Return)を、そして8月号に短篇「キリマンジャロの雪」('The Snow of Kilimanjaro'), 〈コスモポリタン〉誌

(Cosmopolitan) 9月号に「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」('The Short Happy Life of Francis Macomber')をそれぞれ発表。

1937年 38才。1月, アメリカ・スペイン民主主義友好協会(American (昭和12年) Friends of Spanish Democracy)の医務局及び輸送委員会を主宰。2月27日, 北米新聞連盟(North American News-paper Alliance)の特派員としてスペインに渡る。オランダ出身の映画監督ジョーリス・アイバンズ(Joris Ivens)及びカメラマン, ジョン・ファーノ(John Ferno)と協力して記録映画「スペインの大地」(The Spanish Earth)製作。フランスの作家アンドレ・マルロー(André Malraux)に会い, スペイン内乱を主題にした小説の執筆をおたがいに約束する。5月, 帰米。6月4, 5, 6日, ニューヨークのカーネギー・ホール(Carnegie Hall)で第二回全米作家会議(The Second National Congress of American Writer)で「作家と戦争」('The Writer and War')と題する最初で正式講演は一生でこの時だけの演説をし, ファシズム打倒の必要性を説く。7月8日, ホワイト・ハウスでルーズベルト大統領(Franklin Delano Roosevelt, 1933年就任, 第32代)夫妻招待会で「スペインの大地」記録映画を公開, 解説をおこなって多額の寄付金を得る。8月, 再びスペインに赴く。前年12月, キー・ウェストで3人目の妻となる女性, 女流作家マーサ・ゲルホーン(Martha Gellhorn)と知り合い恋愛する。10月15日, 「持つと持たぬと」出版。この作品で金に支配される腐敗した社会での自由な個人に関する諸問題を提出し, 左翼批評家を満足させようと努める。

1938年 39才。この年2度(3月19日と9月1日)スペインに渡る。6月15日, (昭和13年) 映画台本と従軍記「暑さと寒さ」('The Heat and the Cold')を含む「スペインの大地」出版。10月14日, 「第5列および最初の49短篇」(The Fifth Column and the First Forty-nine Stories)出版。更にハバナのアムボス・ムンドス・ホテル(Hotel Ambos Mundos, Havana)で「誰がために鐘は鳴る」の仮題「未発見の国」(Undiscovered Country)執筆開始。

1939年 40才。3月、マドリッド陥落しフランコ(Franco)政府軍の勝利に終
(昭和14年) わる。9月1日、ドイツ軍がポーランドに侵入し、第二次世界大戦
勃発する。12月、キー・ウェストに帰る。

1940年 41才。10月21日、「誰がために鐘は鳴る」(For Whom the Bell
(昭和15年) Tolls) 出版。ベストセラーになる。また「第5列」(The Fifth
Column)ブロードウェイで上演したが不評に終る。11月4日、
ポーリン・プファイファーより家庭不和を理由となるものを提出さ
れ離婚。ワイオミング州シャイアン(Cheyenne, Wyoming)で女流作
家マーサ・ゲルホーンと4年間の共同生活の末結婚しキューバに落
付く。

1941年 42才。特派員として日中事変報道記事を書くため妻マーサと中国方
(昭和16年) 面を旅行。中国語音名、厄納斯特(アーネスト)海明威(ヘミングウェ
イ)、帰国後ハバナ近郊サンフランシスコ・ド・パウラ(San
Francisco de Paula)のフィンカ・ヴィジア(Finca Vigia)と呼ばれて
いる家に定住。12月8日、日米開戦。

1942年 43才。夏、ピラー号をキューバ大使のS・ブレイドン(Spruille
(昭和17年) Braden)の指示でQボート(おとり船)に改装して海軍情報部所属と
なり、1944年までキューバ近海でのドイツUボートの探索に従事す
る。「戦う人々」(Men at War) という戦争小説を編集出版。

1943年 44才。「誰がために鐘は鳴る」映画化される。(パラマウント社、ゲー
(昭和18年) リー・クーパー、イングリット・バーグマン主演)妻マーサは「コウ
リヤ」戦時特派員として1945年まで渡欧。

1944年 45才。3月、英国航空隊報道員としてヨーロッパ戦線に赴く。〈コウ
(昭和19年) リヤ〉(Collier's) 誌特派員として第3軍所属。5月、ロンドンのラウ
ンズ・スクエア(Lowndes Square)での自動車事故で負傷入院。6
月6日、ノルマンディー(Normandy)上陸作戦に従事し、フランス
に渡る。フランスゲリラ隊とパリに突入し、パリ防備の情報蒐集に
努める。さらに敵と戦いながら前進し、ジークフリード線に達する

が、9月2日、「ジュネーブ協定戦時通信員服務規定」(Geneva Convention)違反の疑いで召喚をうける。11月、ユールトゲン森(Hürtgen Forest)の激戦に参加。行動を共にした兵隊たちからPapaの愛称で呼ばれる。「持つと持たぬと」映画化なる。(ウォーナー社、ハンフリー・ボガード主演)

1945年 46才。3月、帰米。第2次世界大戦終結。12月、マーサとの離婚成立。(昭和20年) 短篇「殺し屋ども」映画化なる。(ユニバーサル社、バート・ランカスター主演)

1946年 47才。4月11日、ミネソタ(Minnesota)生まれで「タイム」(Time)誌(昭和21年)のロンドン支社勤務中に知り合った4番目で最後の妻であるメアリー・ウェルシュ(Mary Welsh)と結婚。陸海空3部作を題材にした叙事詩的作品の執筆を始める。

1947年 48才。戦時報道員の勲功に対して、ブロンズ・スター(Bronze Star)(昭和22年)勲章をハバナ大使館付武官より授与される。
短篇「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」映画化なる。(ユナイテッド・アーチスト社、グレゴリー・ペッグ主演)
7月21日、誕生日をポーリンと共に祝った。アーネストは1899年7月21日誕生、ポーリンは1895年7月22日誕生、4つ姉さん女房になる。ハドリーは1892年生まれだから7つ姉さん女房である。メアリーは1908年4月5日生まれでアーネストより9つ下である。マーサはメアリーと同年生まれである。メアリーは夫と先妻の誕生日を同時に祝う主婦の役を果たした。

1948年 49才。11月15日「武器よさらば」特製本出版。キューバで執筆をつづける。(昭和23年)

1949年 50才。イタリアに滞在。猟銃操作の際、誤って怪我をし、目を患う。(昭和24年) 失明の危険に陥ったと伝えられた。短篇「ぼくのおやじ」('My Old Man')映画化なる。
長男ジョン、陸軍大尉、パリで結婚26才。(その3女のうち、マーゴとマリエルは映画女優となる。)次男パトリックは、ハーバード大学

生，21才。3男グレゴリーは，セントジョーンズ大学生，18才。

1950年 51才。「川を渡って木立のなかへ」(Across the River Into the
(昭和25年) Trees)を〈コスモポリタン〉誌2月号より6月号に連載。9月7日に
出版。10年ぶりの小説であったが反応は芳しくなかった。

1951年 52才。「老人と海」(The Old Man and the Sea) 5月に脱稿。6月，
(昭和26年) 母グレース，テネシー州メンフィス(Memphis, Tennessee)の病院
で病死。79才。

1952年 53才。「老人と海」を「ライフ」誌(Life)に一举掲載後，9月8日，米
(昭和27年) スクリブナーズ(Scribners)社，及び英，ジョナサン・ケープ(Jonat-
han Cape)社同時発刊。大評判となる。短篇「キリマンジャロの雪」
映画化する。(20世紀フォックス社，スーザン・ヘイワード主演)

1953年 54才。「老人と海」で52年度ピューリッツァ賞をうける。夏，スペイ
(昭和28年) ンに旅行し，秋，夫人メアリー同伴でアフリカにサファリの旅に出
る。

1954年 55才。1月23日，英領ウガンダ(Uganda)地方にあるマーチソン滝
(昭和29年) (Murchison Falls, Nile河上流)付近で飛行機墜落事故に会うが無事
脱出。奇跡的に一命をとりとめる。この時捜索隊は既に絶望を予想
し，全世界に報道される。4月，アメリカ・アカデミー(America
Academy)賞をうけ，その上1954年度ノーベル文学賞受賞する。し
かし飛行機事故による震盪の後遺症を訴え，自身で受賞のためス
トックホルム(Stockholm)に行けないのを残念に思う。実際に，肉
体も神経も全般的にわたって退化しつつあった。

1955年 56才。負傷の治療にあたる。2月，妻メアリーの父逝く。85才。ハバ
(昭和30年) ナの自宅で釣を楽しみながらアフリカ物語執筆つづく。6月，「老人
と海」撮影ロケーション同行。9月まで断続する。11月，ハバナス
ポーツパレス祝典で勲章を受ける。腎肝臓病悪化。ベッドで越年。

- 1956年 57才。3月、前年の「老人と海」ロケ失敗。ペルー沖で再び撮影。夫
(昭和31年) 妻同行し、種々のアドバイスをし、5月までつづく。
- 1957年 58才。1月、帰米。「日はまた昇る」と「武器よさらば」(パラマウント
(昭和32年) 社、ゲーリー・クーパー主演)映画化なる。
- 1958年 59才。1月、メアリーの母逝く。
(昭和33年) 「老人と海」映画化なる。(ウォーナー社、スペンサー・トレシー主演)
- 1959年 60才。5月、キューバ、社会主義共和国宣言。4月、スペイン旅行、
(昭和34年) 闘牛見物。秋、アイダホ州サンヴァリー(Sun Valley, Idaho)に狩猟
に行き、狩猟中メアリーが左肘を折り、その年の終りまで滞在。
キューバの革命にあたり、一時姿をかくす。
- 1960年 61才。春、前年3月にアイダホ州ケッチャム(Ketchum)の丘に購入し
(昭和35年) た土地、家屋に移る。9月、「ライフ」誌に2人のスペイン闘牛士を
扱ったノン・フィクション「危険な夏」('The Dangerous Summer')
を3回にわたって掲載。8月、単独ジェット機でスペイン行き。マ
ドリッドのホテル、デビス邸で、被害妄想などうつ病症状あらわ
れる。11月30日、高血圧と初期糖尿病のためミネソタ州ロチェス
ター(Rochester)の病院に入院。またノイローゼがひどくなり電撃
療法をうける。
- 1961年 62才。1月22日退院。4月、自殺の気配があったので再入院。6月
(昭和36年) 末退院。キューバはカストロ将軍が実権を奪取したばかりの頃で住
みにくく、ニューヨークからメアリーと共に車で1100マイルのケッ
チャムの自宅に戻り療養していたが、7月2日早朝玄関広間の銃架
のそばで死んでいるのが発見される。愛用の猟銃での自殺である。
5日ケッチャムの墓地に埋葬される。3令息、3姉妹、1令弟、知
友らが送った。地元カトリック教会神父が司祭した。墓石には碑銘
はない。

1962年 4月、「移動祝祭日」(A Moveable Feast)出版。
(昭和37年)

1966年 夏，雑誌記者との対談で，未亡人メアリーが自殺説を認める。
(昭和41年)

1969年 ヘミングウェイの未発表作「ジミー・ブリーン」(Jimmy Breen)
(昭和44年) (1927)と短篇数篇が，ペンシルバニア大学のフィリップ・ヤング
(Philip Young)とチャールズ・W・マン(Charles W. Mann)の両教授
によって未亡人メアリーの手もとにある草稿の中から発見され
る。

1970年 ヘミングウェイの遺作「海流のなかの島々」(Islands in the Stream)
(昭和45年) が10月6日，スクリブナーズ社より出版される。

“A man can be destroyed but not defeated.”「人は殺されるかも知
れない，けれど負けはしないんだ。」ヘミングウェイのことばでこの
章を終わる。

参考文献

1. Along with youth, Hemingway The Early Years by Peter Griffin. Oxford
2. Hemingway, By-Line: E. Hemingway by William White. Scribners
3. E. Hemingway on Writing by Larry W. Phillips. Grafton
4. E. Hemingway: A Life Story by Carlos Baker. A National General Company
5. The Crowd in American Literature by Nicolaus Mills. Louisiana State Uni.
Press
6. 現代作家論 アーネスト・ヘミングウェイ，橋本福夫編，早川書房
7. アメリカ文学うら街道，諏訪 優著，文建書房
8. ヘミングウェイ研究，石 一郎著，南雲堂
9. ヘミングウェイ物語，門司 勝著，葦書房
10. E. Hemingway, ネイサン・A・スコット著，松田 英訳，すぐ書房
11. ヘミングウェイ釣文学全集 上・下，アーネスト・ヘミングウェイ著，谷 阿
休訳，朔風社
12. ヘミングウェイ テーマと研究(N)，野崎 孝著，研究社
13. ローストジェネレーション以後，ジョン・W・オルドリッジ著，佐藤亮一
訳，荒地出版

14. 失われた世代の作家たち, 谷口陸男著, 南雲堂
15. ヘミングウェイ, S・サンダースン著, 福田陸太郎訳, 清水弘文堂
16. ヘミングウェイの考え方と生き方, 中島颯治著, 弓書房
17. フィッツジェラルドとヘミングウェイ, マシュー・J・ブルックリ著, 岡本紀元訳, あぼろん社
18. 立体 アメリカ文学, 田島俊雄・中島 斉・松本唯史共著, 朝日出版社
19. 兄 ヘミングウェイ, レスター・ヘミングウェイ著, 増子 光訳, みすず書房
20. Three Stories and Ten Poems. Contact Publishing Co., 1923